2024 年度　明星大学　人文学部

国際コミュニケーション学科　卒業論文

沖縄方言に関する言語継承意識の調査

学　　科:　国際コミュニケーション
学籍番号:　21H1－027
氏　　名:　金子　直哉
指導教員:　趙　海城

目　次

第 1 章　はじめに 2
1.1　本研究に取り組むきっかけ 2
1.2　本研究の目的と論文構成 2
第 2 章　先行研究 3
2.1　沖縄方言の使用実態 3
2.2　沖縄方言の方言使用意識に関する先行研究 4
2.3　沖縄方言の方言継承に関する先行研究 5
2.4　本研究の位置づけ 6
第 3 章　調査概要 7
3.1　沖縄方言とは 7
3.2　調査方法 8
3.3　調査対象者 9
第 4 章　調査結果と考察 11
4.1　方言に対する意識の調査結果と考察 11
4.2　方言教育に関する調査結果と考察 13
第 5 章　おわりに 15
5.1　まとめ 15
5.2　今後の課題 15
参考文献 17

第１章　はじめに

1.1　本研究に取り組むきっかけ

筆者は幼いころから両親の影響で沖縄県に何度も訪れ、訪れるたびに新しい発見があり、一人旅でも訪れるほどになっている。時には、沖縄で生まれ育った「うちなーんちゅ」と呼ばれる沖縄県民の方々と接することがあり、彼らとの会話の中でよく使われていたのが沖縄県の方言であった。沖縄方言は約 500 年前の琉球王朝時代から受け継がれてきたもので、日本の標準語とは異なる独特の仕組みを持ち、沖縄県民のアイデンティティと深く結びついており、地域社会や島の伝統行事などで不可欠なコミュニケーションツールとなっている。

だが近年、離島を中心とする地域の過疎化、島を出る若者の増加、沖縄方言の母語話者の高齢化といった三つの理由により、沖縄方言の話者数が急激に減少する傾向にある。文化庁によると、「消滅の危機にある言語・方言」に沖縄方言が８分の５を占めていて、今日本で消える可能性が高い方言の一つに数えられるまでになり、沖縄の方言が消滅寸前の危機に瀕しているのである。筆者を含め、他県出身の日本人から見ても沖縄方言には多くの魅力があり、県民のアイデンティティに深く根付いていることが認識されている。多くの人に、沖縄方言が危機的状況にあるということを少しでも知り、興味を持つきっかけとなってほしいと考え、本研究に取り組むことに至った。

1.2　本研究の目的と論文構成

本研究は沖縄方言に対する言語継承への世代間に見られる意識の差に焦点を当てて調査し、世代間の意識に差が生じる要因について主に、学校での方言教育の観点から見ていく。

本稿の第 1 章では、本研究に至ったきっかけ、及び本研究の目的と論文構成について述べ、第 2 章では、沖縄方言の言語継承についての先行研究を概観した上で、本研究の位置付けを明確にする。第3章では、本研究の調査概要を記述する。第4章では、調査結果を分析し、考察する。第 5 章では、本研究をまとめた上で、今後の課題を述べていく。

第 2 章　先行研究

最初に沖縄県の使用実態を知るために、沖縄県が令和 6 年 3 月に行った『沖縄県民しまくとぅば県民意識調査報告書』を見ていく。次に、沖縄方言の継承に関する先行研究として、何(2014)および下地(2019)を概観する。これらを方言意識に関する先行研究と方言継承に関する先行研究として見ていく。

2.1　沖縄方言の使用実態

本節では沖縄県における沖縄方言の使用実態を知るため、沖縄県が令和 6 年 3 月に行った。『沖縄県民しまくとぅば県民意識調査報告書』を見ていく。

『沖縄県民しまくとぅば県民意識調査報告書』は、沖縄県民における「しまくとぅば」（沖縄方言の別名）に関する実態を把握し、普及継承に向けた課題と施策の検討に資することを目的として実施された調査結果をまとめたものである。調査の概要は以下の通りである。

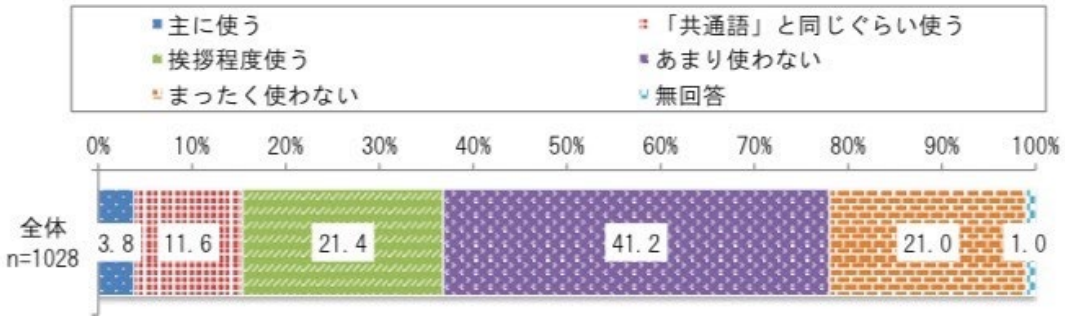
表 1　令和 6 年度沖縄県民しまくとぅば県民意識調査の概要

調査方法	層化二段無作為抽出法による郵送配布、郵送回収/WEB 回収
対象者数	沖縄県内：3,000 件
調査実施期間	2024 年 1 月 31 日～2 月 25 日
回収有効票	1,028 票（調査票回収：748 票、WEB 回収：280 票）
回収率	34.30%

※『令和 6 年 3 月沖縄県民しまくとぅば県民意識調査報告書』より抜粋

本調査で人と話す際に「しまくとぅば」を使うか？という質問に対しては「あまり使わない」という回答が最も高く、図 1 で全体の割合を見ると、「あまり使わない」や「まったく使わない」といった回答が全体の 62.4%を占め(p.10)、多くの沖縄県民は方言を使用していない状況にあることが分かった。また、図 1 で「主に使う」、「共通語と同じくらい使う」と回答した対象者を年齢層別に見てみると、10 代～50 代の調査協力者はいずれも 3%程度で、高齢層である 60 代、70 代でも年齢層全体の 15%程度に留まっている(p.11)。

このことから現在、沖縄県民の中で方言を主に使って会話している若年層は極めて少ないが、高齢層になると方言を主に使って会話している調査協力者の割合がやや高いことが分かり、世代間での方言使用に差が見られることが分かる。



		主に使う	「共通語」と同じぐらい使う	挨拶程度使う	あまり使わない	まったく使わない	無回答
性別	男性 n=290	4.8	17.2	23.1	40.0	14.1	0.7
	女性 n=438	1.1	6.8	21.7	43.8	26.3	0.2
年齢	10代 n=29	3.4	-	27.6	37.9	31.0	-
	20代 n=76	1.3	9.2	18.4	40.8	30.3	-
	30代 n=129	0.8	3.9	22.5	46.5	26.4	-
	40代 n=173	1.2	5.2	25.4	44.5	23.1	0.6
	50代 n=202	2.0	8.9	20.3	47.5	20.3	1.0
	60代 n=231	3.5	17.3	19.5	40.7	19.0	-
	70歳以上 n=174	11.5	21.3	22.4	30.5	13.8	0.6
地域別	北部 n=148	3.4	14.2	25.7	40.5	15.5	0.7
	中部 n=264	4.2	12.5	20.5	42.0	20.1	0.8
	南部 n=432	3.7	7.6	19.7	44.0	24.8	0.2
	宮古 n=35	2.9	28.6	20.0	25.7	22.9	-
	八重山 n=68	4.4	10.3	29.4	38.2	17.6	-
	その他の離島 n=66	4.5	22.7	21.2	34.8	16.7	-

図１　人と話すときに「しまくとぅば」を使うか

※『令和６年３月沖縄県民しまくとぅば県民意識調査報告書』より引用

2.2　沖縄方言の方言使用意識に関する先行研究

本節では、方言使用意識に関する先行研究として下地(2019)を概観する。

本論文は沖縄の若者が使っている「ウチナーヤマトグチ」に焦点を当て、若者が方言自体をどのように考え、どのように扱っているのかを沖縄県の興南高等学校の生徒123名（男子65名、女子58名）を対象にアンケートした結果をまとめた論文である。調査した結果、対象となった若者が使用している沖縄方言には「標準型」の他に「若者型」と「ヤンキー型」の二種類が存在しており、「若者型」の話者は「ウチナーヤマトグチ」を友人との会話などのラフな会話でよく使うが、目上の人と会話では敬語が使いにくいため、あまり使用せず、相手や状況によって「ウチナーヤマトグチ」をう

まく使い分けていることが分かった。一方で「ヤンキー型」の話者は、仲間意識や団結力を高めるため、常に「ウチナーヤマトグチ」を使用しており、その要因としては自己主張のために使用し、相手によって言葉を変化させないことにある。仲間内での使用が多く、友人間で多く使用しているのも特徴の一つである。これらのことから「ヤンキー型」を話す若者の「ウチナーヤマトグチ」使用率は高かったが、逆に「ヤンキー型」を使用しない若者の方言使用頻度は低く、方言に対する意識も低いことが分かった。しかし、方言を使うことに対しては肯定的な意見もあり、方言を使うことで自分のアイデンティティを主張できるという意見も調査結果として得られた。

これらのことから若者(の一部)は、一括りに方言に対する意識が低いとは断定することは難しく、方言の形を自分たちで変化させながら使用していることが分かった。

2.3　沖縄方言の方言継承に関する先行研究

本節では、方言継承に関する先行研究として何(2014)を概観する。

何(2014)は、勝連半島にある二つの小学校に通っている小学校 5 年生 113 名を調査対象に、言語環境、沖縄方言への意識、家族の方言の使用状況などの項目を設け、アンケートを行った結果を分析したものである。論文では、沖縄方言の衰退や喪失に関わる要因を分析し、方言の伝統的な価値が無くなるという不安や喪失感、共通語へのコンプレックスなどが沖縄方言の言語継承に大きく影響していることが問題であると指摘されている。

まず言語環境に関する調査の結果は、沖縄方言を「自由に話せる」と回答したのは一人しかいない。さらに「全然話せない」と回答したのは 16 名で、この数値も全体の数から見ると少ない。一方で、「少ししか話せない」と回答した人は、全体の 66%にもなり、これらの結果から、小学校高学年では、沖縄方言を少しは理解できる調査協力者は多く存在しているが、自由に話すことが出来る協力者は極めて少ないことが分かる。

次に沖縄方言への意識に関するアンケートの結果を見ていく。調査結果から、沖縄方言を保存すべきであるという考えを持った調査協力者が全体の 78%を占めており、多くの調査協力者が沖縄方言を自由に使うことはできないが、沖縄方言を今後も保存していきたいと回答したことから、小学生でも、方言継承意識が強い児童が多く存在することが分かった。

また、現在使われている沖縄方言は純粋な沖縄方言とは言えるものではなく、「多くの標準的日本語の要素が入っており、日常的に方言を使用する場合、どうしても日本語を取り入れないと意思を十分表現できないほどになっている」(何、2014：157)とあり、これは筆者が行っていく調査でも、念頭に置いておかなければならないことである。

2.4　本研究の位置づけ

沖縄方言の使用に対する意識調査や言語継承に関する先行研究には様々なものが存在するが、異なる世代間を比較しながら論じている先行研究は、管見の限りあまり見られない。また、先行研究を読み進めていく中で、今日の沖縄県民は、沖縄方言を自由に使うことのできる県民は極めて少ないが、方言継承意識が高いことが分かり、沖縄方言の継承には学校教育の中で方言教育が極めて重要であることが分かった。

そこで、本研究では沖縄方言の言語継承意識を異なる世代間で比較しながら分析していく。また、方言使用意識を踏まえて、これから沖縄地域で方言継承をどのように行っていくべきかについて考察する。

第 2 章では、現在の沖縄方言の使用実態、沖縄方言に対する意識と言語継承意識についての先行研究を概観した。第 3 章では、本研究の意識調査の概要を述べていく。

第３章　調査概要

本章では、沖縄方言の定義を規定した上で、調査の概要について述べる。

3.1　沖縄方言とは

沖縄県で話されている方言をまとめて沖縄方言というが、種類は奄美・沖縄方言、先島方言、与那国方言と大きく三つに分かれており、その中でも方言が地域によって細かく分かれている。

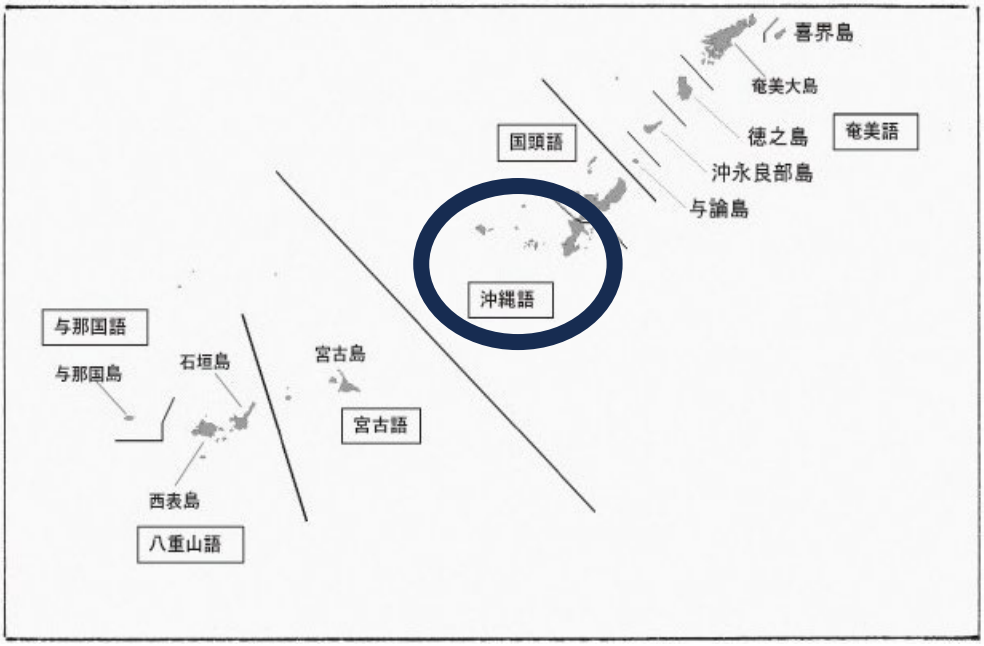


図２　琉球諸語の分布図

『沖縄語をさかのぼる』P.6 より抜粋

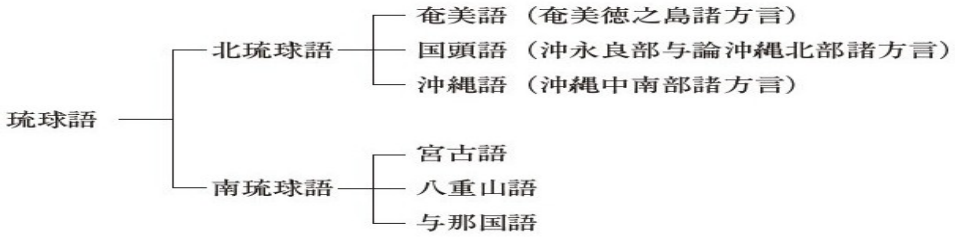


図２　琉球諸語の分類

『沖縄語をさかのぼる』P.6 より抜粋

次に標準語と沖縄方言の母音の数、単語の変則的な変化について概観する。標準語

は「あ・い・う・え・お」という 5 つの母音からできているが、沖縄では「あ・い・う」という 3 つの母音に変化し、「あ・い・う・い・う」となる。標準語に比べれば、沖縄方言の母音の数は少ない。また、「か」は「くゎ」、「き」は「ち」に変化し、タ行は変則的で「た・ち・つ・てぃ・とぅ」と変化する。例としていくつかの単語を下記に挙げる。

表 2　標準語と沖縄語の語句の変化（筆者作成）

単語例	標準語	沖縄語
心	こころ(kokoro)	ククル(kukuru)
米	こめ(kome)	クミ(kumi)
手	て（te)	テイ(tei)
沖縄ことば	おきなわことば(Okinawa-kotoba)	ウチナークトゥバ(uchina-kutuba)
清明（お盆）	せいめい(seimei)	シーミー(siimii)

このように、母音の数と単語の変則的な変化から沖縄方言を含む琉球諸語は本州で話されている言語とはまるで違うことが分かる。

3.2　調査方法

本節では、本研究の調査方法を述べていく。本研究では、沖縄方言の継承に関する世代間の意識の違いに注目し、半構造化インタビュー形式で、沖縄本土に行き対面で調査する。本研究は図 1 に記されている沖縄語を調査対象言語として、その沖縄語の使用状況及び継承についての意識調査を行う。なお、インタビューの際には相手の身体的負担や精神的負担を考慮して行い、研究倫理を遵守している。

本研究では、愛知県豊明市において「若年層の方言使用と方言意識」を調査した近藤(2010)と、沖縄本島中南部において「若者におけるウチナーヤマトグチ使用」を調査した下地(2019)を参考に、質問項目を以下のように設定した。

• フェイスシート

年齢

性別

言語形成期（15 歳まで）にどこで育ちましたか？

• **方言に対する意識の質問**

沖縄方言を話す人が減っていると思いますか？

→その理由を教えてください。

沖縄方言をこれからも残していきたいと思いますか？

→それはどうしてですか？

• **方言教育についての質問**

学校ではどういった方言教育が行われていましたか？

→どのような授業でしたか？

→このような授業を通じて方言に触れる機会が増えましたか？

3.3　調査対象者

本調査は、図 1 の沖縄語が話されていると思われる那覇市、糸満市、豊見城市、浦添市、うるま市の在住者を対象に実施した。調査対象者は若年層（20 代から 30 代前半）、中年層（30 代後半から 50 代）、高齢層（60 代以上）と各年齢層それぞれ 3 名である。

調査実施の概要は以下のとおりである。

表 3　調査概要

日時	2024/9/3-2024/9/8
形式	半構造化インタビュー形式
対象地域	沖縄県那覇市、糸満市、豊見城市、浦添市、うるま市
調査対象者	若年層（20 代から 30 代前半）3 名 中年層（30 代後半から 50 代）3 名 高齢層（60 代以上）3 名
調査場所	調査協力者の自宅近くのレストラン、沖縄県立博物館

表 4　調査協力者の内訳

No.	年齢	性別	偽名	出身地域	言語形成期[1]の地域
1	20 代	男性	健太	沖縄県浦添市	沖縄県浦添市
2	20 代	女性	彩花	沖縄県うるま市	沖縄県うるま市
3	30 代	男性	翔太	沖縄県うるま市	沖縄県うるま市
4	40 代	女性	由美	沖縄県那覇市	神奈川県横浜市
5	40 代	女性	美咲	沖縄県那覇市	沖縄県石垣島
6	50 代	女性	裕子	沖縄県糸満市	沖縄県宮古島
7	60 代	男性	明夫	沖縄県浦添市	沖縄県浦添市
8	70 代	女性	良子	沖縄県うるま市	沖縄県うるま市
9	70 代	女性	京子	沖縄県那覇市	沖縄県那覇市

※由美は言語形成期こそ神奈川県横浜市であったが、両親も沖縄出身であり、なおかつ由美の出身地域も沖縄県那覇市で、今日まで沖縄で長年生活しているため、調査対象から外さなかった。

第 3 章では、本調査における調査手法および、調査言語について述べた。第 4 章では沖縄方言に対する意識と方言教育に関する調査結果とその考察を述べる。

[1] 本稿では、『ブリタニカ国際大百科事典』を参照して、5 歳～12 歳を言語形成期と見なす。

第 4 章　調査結果と考察

本章では、沖縄本島で実施したインタビューの結果を分析し、分析結果について考察する。

4.1　方言に対する意識の調査結果と考察

まず、現在の沖縄方言話者による沖縄方言に対する使用意識と継承意識を分析する。

「沖縄方言を話す人が減っていると思いますか？」という質問に対して、9 名の内、美咲、裕子、明夫、良子、京子の 5 名は減っていると回答し、健太、彩花、翔太、由美の 4 名は「分からない」と回答した。

→その理由を教えてください。

「減っている」と回答した対象者の理由として、70 代の良子は「自分たちより下の年代で日常会話の中で方言を使っている人をあまり見かけない」、60 代の明夫は「県外からの移住者が増加し、標準語での会話が主流となり、沖縄方言を使う機会が減少している」などの意見が見られた。

一方、「わからない」と回答した対象者の理由として、20 代の健太は「自分の周りで方言を使って話しているのは家族以外にいない」、20 代の彩花は「同級生との会話でも沖縄方言を使わない」といった意見があった。本研究で得たデータを見る限り、年齢層が下がるほど方言使用の頻度は低下していることが分かった。しかし、30 代の翔太から「方言使用の頻度が低い年齢層でも家族の中での会話では祖父母や両親が話しているのを見かけるので、すべて理解しているわけではないが、顔の表情やときどき聞こえてくる標準語から話の流れを推測することはできる」という意見も見られた。また、年齢層で見た方言使用の頻度こそ低いものの、他の年齢層の沖縄方言話者と関わることで沖縄方言に関わる機会を得ているという場面もあれば、40 代の由美は「祖父母が沖縄方言を話さないため、両親も話さず、私も十分に理解できていません」という意見もあった。

年齢層が上がるにつれて方言使用の頻度は増えていくが、高齢層の中には、学校教育の中で沖縄方言を話さないようにと教えられて育ってきた協力者もいる。これは、

日本政府が行った「標準語励行運動」[2]の一環である「方言札」[3]という学校内でのルールによって沖縄方言の使用は禁止され、標準語を沖縄県に強引に浸透させようとしたことで起こってしまった現象である。この取り組みは第二次世界大戦後まで続けられたため、高齢層の中には実際に体験して、非常につらい日々を送ったと言及する協力者もいた。この教育を受けた世代が親となっても子供に沖縄方言を教えることが不可能であるために、方言使用の頻度が減ってしまい、またその子供が親になったとしても同じことの繰り返しとなってしまう。これは沖縄方言の話者数減少の理由の一つとして挙げられる。

このようなことを踏まえて、沖縄方言の方言継承意識に関しては、家庭や協力者の属しているコミュニティーのなかで関わっている人物が日常生活においてどのくらい沖縄方言を使って生活しているのかによって、方言使用意識に差が出てくるのではないかと考えられる。

また、「沖縄方言をこれからも残していきたいと思いますか？」という質問に対しては、協力者全員が「残していきたい」と回答した。

「それはどうしてですか？」という理由を聞くと、70 代の京子は、「自分は沖縄県に生まれ、今もそこで生きているという証になる」と言い、30 代の翔太は、「メジャーな方言ではないかもしれないけれど、沖縄県を支えている大切な文化だから」、「自分の祖先たちが大切にしてきた言葉だから」と話していた。前の質問事項で述べたような悲惨な過去があり、今もなお、話者数の低下などの問題も存在し、中には「今の状態が続けば 3 年から 4 年程度で沖縄の方言は完全に消滅してしまうかもしれない」という意見が出るほど方言の消滅も危惧されているので、沖縄県民の大多数が沖縄方言をこれからも残していきたいと考えているのではないだろうか。

また、沖縄方言を継承する方法について質問すると、回答の中で一番多かったのは、歌による継承であった。筆者は何度も沖縄県を訪れているが、沖縄の人々が沖縄方言を使った歌を披露している場面を何度か見かけた。

---

[2] 沖縄の生活風俗を大和風(日本風)に改めようとする動き
http://rca.open.ed.jp/history/story/epoch4/sotetu_4.html

[3] 標準語の使用を強制させるため、学校で方言を話した者に、罰として首から下げさせた木札。各地にあるが、特に沖縄で厳しく行われ、明治末から第二次大戦後まで用いられた。https://kotobank.jp/

沖縄県出身の有名なアーティストである BIGIN や MONGOL800 の楽曲の中でも、沖縄方言が度々登場していて、沖縄方言を耳にする機会の増加に繋がっており、最近では、SNS などで有名な曲を全て沖縄方言に変えて歌うコンテンツなども人気を博して、コンテンツによっては 100 万回以上再生されるものもあるほど、沖縄県民以外にも、沖縄方言に触れるチャンスが増えている。これらのことからも沖縄方言の継承には歌が絶大な効果を発揮できることが予想される。

4.2　方言教育に関する調査結果と考察

次に、方言教育がもたらす言語継承意識への影響について分析する。

「学校ではどういった方言教育が行われていましたか？」という質問に対する回答をまとめると、20 代から 30 代までは沖縄方言を使った劇を行ったり、三線(さんしん)という中国で生まれて、のちに沖縄に伝わった楽器を使って歌を歌ったりする授業はあるが、40 代以降では沖縄方言を使った授業は行われていなかったというものが見られた。これは前記した「標準語励行運動」の流れの影響は彼らが小学生のころはまだ残っていたのではないかと筆者は推察する。

その理由として、沖縄県公文図書館の「あの日の沖縄」というコラムには「沖縄県では、本県文化の基層といえる「しまくとぅば」を次世代へ普及継承していくことが重要であるとして、2006 年（平成 18）3 月 31 日に「しまくとぅばの日に関する条例」を制定し、9 月 18 日を「しまくとぅばの日」としました」と書いてある。条例が制定された後の沖縄県の活動として、當山(2019)によると「県は 10 年後の復帰 50 年に「しまくとぅばの話者」を現在の 30%増をめざす「普及促進行動計画」を策定している。那覇市は自治体に対して「ハイサイ・ハイタイ運動」を実施し、2019 年度は教育委員会が市内の小学校に副読本を配布した。那覇市役所の採用試験では「うちなーぐち」の挨拶を取り入れるなど、県が主体になったさまざまな取り組みがなされている。市内の公民館、博物館や図書館においても近年、方言講座の開設などさまざまな試みがみられる」（當山、2019：170)とあり、条例の制定をきっかけに沖縄方言の保存、そして継承へと本格的に動き出したことが分かる。よって、本調査の限り、条例が作られた以降の世代には学校で方言教育が実施されているが、条例が作られる前の世代では学校で方言教育が組織的に実施されていなかったことが分かる。また、方言教育を学校で受けた 20 代、30 代の協力者は学校の授業を通して、沖縄方言に触れる機会

が増えたと全員が回答し、青年会というエイサーの伝統を守り次の世代に伝えていく活動を行っている団体に所属している協力者も見られた。一方で、学校で方言教育を受けていない協力者であった 60 代の明夫は「母が沖縄方言を伝える活動をしており、沖縄方言に対して厳しい制限がありながらも、今の時代まで残し、家族の会話ではよく使っていた。なので、自分も次の世代に沖縄方言を伝えていきたい」という意見もあった。この意見から、学校での方言教育を受けていない 40 代以降の協力者でも、家庭内で沖縄方言が使用される環境があれば、言語継承意識は保たれており、一括りに方言教育を受けていない年齢層は言語継承意識が低いとは断定できず、環境的な要因が言語継承意識の差を生み出す要因であることが分かった。

以上インタビューデータを分析し、その調査結果を考察した。第 5 章では、第 4 章の考察をまとめた上で、今後の展望を述べていく。

第５章　おわりに

5.1　まとめ

本研究では現在の沖縄県民の言語継承意識について分析し、言語継承意識の差を生む要因、沖縄県の方言教育の実態を明らかにした。その結果を以下にまとめる。

現在の沖縄県民における沖縄方言の言語継承意識には家庭や協力者の属しているコミュニティーの中で関わっている人物が、日常生活においてどのくらい沖縄方言を使って生活しているのか、いわゆる、環境的要因によって言語継承意識と方言使用意識に差が出てくることが分かった。また、今回の調査ではどの世代、どの性別でも、沖縄方言が衰退して、無くなってしまってもかまわないと考えている人は存在しておらず、皆がどうにか自分達の生まれ育った故郷の言葉を残そうとしていることも分かった。また、沖縄県が「しまくとぅばの日に関する条例」を制定し、沖縄方言の保存と次の世代への継承に本格的に動き出したのは 2006 年であり、条約が制定されて 18 年とまだ歴史は浅いが、実際に学校で方言教育を受けた年齢層は沖縄方言に触れる機会が増え、現在の沖縄方言の状況を理解する機会ともなっている。一方で、方言教育を受けていない年齢層は「方言札」で学校では方言の利用を禁止されていても家庭内での会話では沖縄方言を使用するなどして、今の時代まで沖縄方言が継承されてきた。

今後は、「しまくとぅばの日に関する条例」による沖縄県の行っている活動を一人でも多くの沖縄県民に広め、学校で行う組織的な方言教育だけでなく、家庭内やコミュニティーの中で沖縄方言をより多く日常会話の中に取り入れることで、沖縄方言を使う機会を増やし、方言使用頻度が低い若年層に沖縄方言を身近に感じてもらうためにＳＮＳで沖縄方言に関するコンテンツを発信していくなど、様々な方法を取り入れることで沖縄方言の保存と継承に寄与できると考える。

5.2　今後の課題

本研究では沖縄県の南部を対象にしたインタビュー調査により、この地域に住む県民の方言意識と言語継承意識が明らかになってきた。しかし、本研究では、沖縄県の南部に調査範囲を絞って調査したため、八重山諸島などの離島に住む沖縄県民や、本調査の調査言語とした沖縄語の範囲外に住む沖縄県民の方言意識と言語継承意識については考察できなかった。今回の調査地域外となった沖縄県のエリアを対象に、より多くの人数を比較することができる手法を用いて分析していくことで、また沖縄県の

エリアごとの方言意識と言語継承意識の地域差を比較することで沖縄県全体の言語継承意識を探る事ができると考えた。また、沖縄方言のみならず、日本に存在している少数言語における言語継承活動と沖縄県の行っている言語継承活動などを比較し、どのような活動を行うことが言語継承意識を保ち、少数言語の保存と継承により役立つのかを探ることで、もっと効果的な施策を講じることができると考えた。これらを今後の課題とする。

参考文献

何俊山(2014)「衰退しつつある沖縄方言」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』26, pp.148-173.

近藤紗奈(2010)「若者の方言使用と方言意識―愛知県豊明市の中学生を対象としてー」『東京女子大学言語文化研究』19, pp.33-49.

島袋盛世(2021)『沖縄語をさかのぼる』白水社

下地美紀(2019)「沖縄本島中南部の若者におけるウチナーヤマトグチ使用－方言に対する意識から沖縄方言の現状を探る－」『理論地理学ノート』21, pp.43-54.

當山奈那(2019)「琉球諸語における音声教材作成について：言語習得と方言教育と危機語の記録保存の各観点から」『琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科』5, pp.161-183.

森田帆南(2019)「千葉県市原市における伝統方言の若年層への継承について－アンケート調査による継承の実態と継承に関わる要因の分析－」修士論文、立命館大学大学院言語教育情報研究科 pp.1-80.

文化庁　「消滅の危機にある言語・方言」（アクセス日：2024 年 7 月 24 日）
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/index.html

コトバンク『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』（アクセス日：2024 年 10 月 18 日）
https://kotobank.jp/dictionary/britannica/

沖縄県公文図書館『あの日の沖縄』（アクセス日：2024 年 11 月 6 日）
https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4940

琉球文化アーカイブ『沖縄の歴史』（アクセス日：2024 年 11 月 14 日）
http://rca.open.ed.jp/history/story/epoch4/sotetu_4.html

コトバンク（アクセス日：2024 年 11 月 25 日）
https://kotobank.jp/